

陳 述 書

2020（令和2）年6月19日

氏名 伊 藤 悟

1 はじめに

私は、1953（昭和28年）年生まれの67歳で、8歳年下のパートナーのやなせりゆうた築瀬 竜太（以下「築瀬」といいます。）と一緒に暮らしています。築瀬との交際は今年で35年目になり、2019（平成31）年1月には千葉市のパートナーシップ宣誓を行いました。

1994（平成6）年、私と築瀬は、同性愛やセクシュアリティの多様性に関する人権啓発を行う「すこたん企画」（現在は「すこたんソーシャルサービス」に改称）を設立しました。以来25年間、私は、同団体の代表として同性愛者の相談や交流の場作りに携わってきましたが、昨年、若手に代表をバトンタッチし、現在は相談役として運営に関わっています。また、私は、山形県の東北芸術工科大学において講師を務めており、さらに、千葉県人権講師として、千葉県内の学校、自治体、企業等で研修の講師も務めています。

これから、私のライフヒストリー及び「すこたん企画（ソーシャルサービス）」の活動の歴史についてお話しします。

2 同性に惹かれることを隠していた学生時代

私は、小学生の頃から同性に惹かれるようになりました。ただ、その頃はまだ特別なこととは思っておらずそのうちに女性を好きになるかもしれないと

思っていました。

私は私立開成中学校に進学し、中学3年生のとき、初めて同性を恋愛対象として意識するようになりました。そして、自分が他の同級生と違うことに気づき、なぜ自分が同性に惹かれるのか考えるようになりました。あるとき、「同性愛」という言葉を知り、辞書で「同性愛」を引いてみると、「異常性欲」「変態性欲」「性倒錯」という単語が並んでいました。私は、これらの単語を見て衝撃を受け、将来どのように生きていけばよいらろうと絶望的な気持ちになりました。そして、同性に惹かれることを決して人に知られてはならないと思いました。

その後、中学・高校を通じ、絶えず同級生に片想いをしていましたが、告白したら自分が同性愛者であることを否定され、周りに言いふらされてしまったらどうしようと思うと怖くて告白できませんでした。

高校卒業後、東京大学に進学しました。大学生になると、男性への恋愛感情をさらに明確に意識するようになり、サークルのノンケ（ゲイ用語で異性愛の男性のこと）の後輩を好きになりました。私は一生懸命ノンケの振りをして、同性愛者だと感づかれそうになると冗談でごまかしていましたが、いつもその後輩と一緒に行動していたので、その後輩には薄々感づかれていたかもしれません。しかし、サークルの仲間に自分が同性愛者であることをカミングアウトする勇気はなく、4年間片想いのままで終わりました。

3 他の同性愛者と出会いを求めるようになった頃

(1) 私は、東京大学を卒業し、一橋大学院に2年間在籍した後、20代後半に千葉県私立高校の教師として働き始めました。私は、ノンケの男性への実らない恋に賭けるより、同性愛者と知り合って恋愛したいと思うようになり、同性愛雑誌の通信欄に投稿するようになりました。

当時、同性愛の男性は、テレビや雑誌で「ホモ」と呼ばれ嘲りの対象となっていたことから、同性愛者であることを隠して、異性愛者を演じて生きることを強いられていました。また、男は結婚して一人前という固定観念があり、家族や勤務先からの結婚圧力が強かったため、皆、一定の年齢を超えると結婚せざるをえませんでした。

このような社会状況から、同性愛の男性は自分の身元を明かせないため、出会いの手段は同性愛雑誌の通信欄か新宿二丁目に行くくらいしかありませんでした。同性愛雑誌の通信欄とはどのようなものか説明しますと、まず、雑誌の通信欄に、友達を募集する人の自己紹介文(今のツイッターくらいの文字数です)が沢山掲載されており、もし私が115番の人が気になると思ったら、編集部に「115番に転送してください。」と書いて手紙を送ります。届いた手紙を編集部が115番の人に郵送し、115番の人が私に返事を書くというものでした。やり取りが始まるまで最大で1か月かかるという非常に面倒なシステムでしたが、互いの名前や住所を知らせずやり取りできるというメリットがありました。

- (2) 雑誌の通信欄でやり取りをしたなかで、忘れられない経験があります。1983(昭和58)年、私は、通信欄を通じて寿司屋で働いているという5、6歳年下の若者と知り合いました。手紙や写真をやり取りしているうちに盛り上がり、直接会うことになりました。ただ、ちょうど彼がバイクのツーリングに数日間行く予定があったため、彼が帰ってきてから会うことになりました。出発の前夜、自宅のポストに彼からの手紙が届き、手紙には「これから行ってきます。帰ったら絶対に会いましょう。」と書いてありました。

しかし、ツーリングから帰ってくる日を過ぎても、彼から連絡がありませんでした。私はおかしいと思い、彼が働いている寿司屋を訪ねたところ、彼

がバイク事故で亡くなっていたことがわかりました。私はショックを受けましたが、そもそも彼と一度も会ったこともないため、諦めるしかありませんでした。

それから1か月くらいして、自宅に「お宅の伊藤悟さんはどちらの高校にお勤めですか？」と尋ねる電話がかかり、電話に出た母が答えてしまいました。それから数週間後、勤務する学校に私宛ての郵便物が突然届き、中に同性愛雑誌が入っていました。送り主の住所を調べましたが、でたらめの住所でした。その数日後、今度は学校に脅迫の手紙が届きました。手紙には、私が同性愛者であることを学校にばらすと書いてありました。私は手紙を読んでショックを受け、校長に同性愛者であると知られてしまったらどうなってしまうだろうとパニックになりました。学校を辞めさせられるかもしれないし、周囲に広まってしまうかもしれない、教師の仕事が続けられないかもしれない、と怖くてしかたありませんでした。そして、どうせ知られるなら先回りして説明した方がいいと思い詰め、校長に、自分は一人っ子で兄弟がいないので男の子を弟のようにかわいく思って同性愛雑誌を見たとしどろもどろになりながら話しました。

せっぱつまった私は、亡くなった彼が働いていた寿司屋を訪ねました。すると、寿司屋の親方のような人が出てきて、もしかして脅されているのではないかと聞かれました。親方は、「俺がなんとかしてやる。」と言い、「いくら出せる？」と聞いてきたので、私は3万円（現在の4, 5万円相当だと思います）であれば払えると答え、藁にもすがる気持ちでお金を渡しました。その後、親方から連絡があり、亡くなった彼には暴走族に入っていた過去があり、その頃の不良仲間が遺品整理のときに私の手紙を見つけて脅迫してきたようだとされました。そして、「もう金で解決したから大丈夫だ。安心

しなさい。」と言われ、その後脅迫はなくなりました。しかし、初めて恋人ができるかもしれないと期待していたのが一転脅迫されることになったことで、私は非常に落ち込み、しばらく同性愛雑誌を見るのも嫌になりました。

このようなことが起こったのは、同性愛に対する差別・偏見があるため、同性愛者が自身のセクシュアリティを隠して生きざるを得ないからです。皆同性愛者であることを隠して生きており、日常生活において同性愛者と出会う機会がないことから、いきなり知らない人と出会うというリスクを負わなければならないのです。同性愛に対する差別偏見は今もなお存在するため、同じようなことは現在でも起こりうると思います。

- (3) 80年代の前半、当時人気だった「薔薇族」というゲイマガジンに10代の若者が投稿できるコーナーがあり、「これから若いゲイが世の中を変えていくんだ!」という意気盛んな投稿が沢山掲載されていました。なお、この頃から、男性同性愛者の呼称として「ゲイ」という単語が一般的に使われるようになりました。

この投稿コーナーから東京や大阪でサークルが生まれ、多くの若者が活発に交流していました。東京のサークルのリーダーをやっていたN君はとても血気盛んな人で、「ゲイが差別される世の中がおかしいんだ。」と言っていました。ちなみに、N君は、その後府中青年の家事件の原告となった「動くゲイとレズビアンのかい」（通称「アカー」）の創設メンバーとなります。

私は、N君と知り合い、自分も世の中を変えるために行動したいと思うようになりました。そして、N君の「まずはゲイについての本を出したい。」という話に賛同し、1986（昭和61）年の春、一緒に「オトコノコのためのボーイフレンド」というゲイ向けのハンドブックを出版しました。この本には、カミングアウト、ゲイの間で友情は成り立つか、通信欄の使い方、

アメリカのゲイムーブメント、日本男色史など、当時としてはできる限りの様々な情報を盛り込み、ゲイに関する本がほとんどない当時の状況のなかで画期的な本だったと自負しています。私は、この本を出したことで再び前向きな気持ちを持てるようになりました。

4 築瀬と知り合い「すこたん企画」を設立するまで

- (1) 1986（昭和61）年4月、私が32歳のときに、雑誌の通信欄を通じて築瀬と知り合いました。私達には、洋楽という共通の趣味があり、音楽の話をしていると話が尽きませんでした。その後、週1回彼の車でデートするようになり、知り合って1、2か月後に付き合い始めました。

当時、私は、まだ自分がゲイであることを完全に受け入れられておらず、男女のカップルと同じようにデートしたいという気持ちが強くありました。そのため、築瀬とのデートでも、男女のカップルに人気のデートスポットに行ったり、人前で築瀬と手をつなごうとしたりしました。しかし、当時は、同性愛者に対する偏見が今よりもっと強く、男性同士がカップルのように振る舞うことに否定的な視線が注がれました。築瀬が人前で目立つことを気にしたことから、折衷案として、人目のない田舎へドライブに行くことが多くなりました。ドライブデートを重ねていくうちに、実は私自身も人混みが得意ではなく無理をしていたことに気づきました。なお、現在でも状況はあまり変わっておらず、多くのゲイのカップルが、人目を気にしながらデートをしています。

- (2) 私は、1981（昭和56）年に父が亡くなってから、母と二人暮らしをしていました。30代になると、たまに母から結婚の話をされるようになりましたが、私はいつも話を逸らしていました。浮いた話がない私に、母も内心おかしいと思っていたかもしれませんが、それ以上干渉されることはあ

りませんでした。私は、母が悲しむと思い、ゲイであることをカミングアウトすることができませんでした。

- (3) 築瀬との交際も7年目に入り、私は、築瀬と一緒に暮らしたいと思うようになりました。ただ、母が高齢になり独りにできないことから、築瀬を自宅に呼び寄せて母と同居することにしました。しかし、母と同居するには築瀬との関係を説明しなければなりません。私は、悩んだ挙句、母に自分がゲイであり、築瀬がパートナーであることをカミングアウトすることにしました。

私は、緊張しながら母にカミングアウトし、世の中には何パーセントか同性愛者がいること、性的指向は自分の意思では変えられないことを説明しました。母は、「自分では変えられないものなのね。あなたの人生だから好きに生きなさい。」と理解してくれました。築瀬も、その1か月後、彼の母親にカミングアウトしましたが、とまどいながらも励ましてくれたということでした。

- (4) 1993（平成5）年、自宅の一室を築瀬の部屋に改装し、私達カップルと私の母の二世帯で暮らし始めました。同じ年に、私達は、「男ふたり暮らし」という本でゲイであることをカミングアウトし、母と二世帯で同居することを公表しました。本の出版後、女性週刊誌から私達カップルと母の同居生活について取材の申込がありました。担当ライターが、「絶対に興味本位な見出しをつけたり、からかうような扱いはしません。」と断言したので、私達はその言葉を信じて取材を受けました。取材では私達の話丁寧聞き、同性愛者が置かれている状況にも共感している様子でした。しかし、発売日に雑誌を見ると、私達の記事が「爆笑・姑感激 ゲイの花嫁」という見出しに変えられていました。私はショックを受けて担当ライターに抗議し

ましたが、デスクが決めたのでどうしようもないと取り付く島もありませんでした。

また、同じ頃、日本テレビの「進め！電波少年」という番組が、突然自宅に押しかけてきたことがありました。この番組は、アポなしで押しかけて無茶な依頼をするという番組でした。私が自宅にいたとき、突然、玄関のチャイムが鳴り、ドアを開けると、目の前に赤ちゃんの扮装をしたタレントの松村邦洋が立っていました。そして、ゲイカップルには子供ができないので子供になりたいと言って、いきなり家に入ってきました。私は、激怒して追い返し、日本テレビに抗議しましたが、なしのつぶてでした。

さらに、近所には築瀬の同居について話していませんでしたが、周囲の隣人は知っていたようで、築瀬が外に出ると窓をいきなり閉めるなどの嫌がらせを受けるようになりました。ある女性の隣人は、築瀬が母の買い物に付き添っているときに駆け寄ってきて、築瀬を無視して、母に「大丈夫。いつか息子さんにいいお嫁さんが来るから」と言いました。このような嫌がらせが続くうちに、築瀬は近所の住民の視線が怖くなり、外出できなくなっていました。

このような様々なストレスに築瀬が精神的に耐えられなくなったため、約1年で同居生活を解消することになりました。

- (5) 同居生活を解消したのと同じ頃、たまたま「アカー」がストーンウォールの反乱25周年のニューヨークのプライドパレードに参加するツアーを募集していました。ストーンウォールの反乱とは、1969（昭和44）年、ニューヨークのストーンウォール・インに警察が踏み込み、店員や客を連行しようとしたのに対し、店内にいた同性愛者やトランスジェンダーが立ち向かい、2000人を超える暴動に発展したという事件で、性的少数者の人

権活動の発端になったと言われる事件です。私と築瀬は気分転換にツアーへ参加することにしました。

ニューヨークのパレードは、参加者や沿道で応援している人達も含めると100万人近くとけた違いに多く、私達はそのエネルギーに圧倒されるばかりでした。パレードを歩いていると沿道から、セクシュアリティを問わず沢山の人が、「ゲイは素晴らしい。」とか「プライドを持て。」というプラカードを持って温かい声援をかけてくれました。私達は、これまでゲイであることを肯定されたことがなかったので、ありのままの自分でいいんだと励まされた気持ちになりました。

また、このツアーには、パレードの後、ニューヨークの同性愛者のコミュニティや人権団体の活動を視察するという企画も入っていました。視察した団体のなかに、州や市から助成を受けて、小学校、中学校、高校に同性愛当事者を派遣し、生徒に同性愛の話をして自分たちの存在を知ってもらう活動をしている団体がありました。築瀬は、学生時代にこんな話を聞いていたらゲイであることをもっと受け入れられていたと感動し、日本で同じ活動をやってみたいと言い出しました。私も築瀬のアイデアに賛成し、1994（平成6）年、同性愛やセクシュアリティの多様性に関する人権啓発を行う「すこたん企画」を設立しました。

5 すこたん企画の活動のなかで経験した差別・偏見

- (1) 「すこたん企画」で初めて行った活動は、女性問題に関わる団体が主催する「花婿学校」での講演でした。「花婿学校」は、「性別」「らしさ」や世間の常識に縛られた生き方ではなく、新しい時代の恋愛・結婚のあり方を問い直そうという趣旨の講座で、私はシンポジウムのパネリストとして同性愛者の立場から話をしました。

シンポジウムが終わり、質問の時間に入ると、一人の男性が、私と築瀬の見た目が普通で異性愛者と区別がつかないから、同性愛者と異性愛者を区別する方法を教えてくださいと質問してきました。私が、区別することにどのような意味があるのかと尋ねたところ、その男性は、自分が同性愛者に襲われるかもしれないので区別する方法を知りたいと答えました。私は、区別する方法などないし、そもそも同性愛者が男を襲うと考えるのがおかしいと反論しましたが、男性は頑として質問を取り下げませんでした。30分以上押し問答が続いた後、一旦、男性は質問を取り下げましたが、再び「私は身体が小さいので、アメリカに行って襲われたとき心配です。やっぱり区別法を教えてください」と言い出しました。私は、なぜ同性愛者は男と見たら襲うと思うのかと腹が立ち、次第に語気も荒くなってきました。

質問時間が時間切れとなり、私が席を立とうとしたところ、一人の女性が手を上げて、「伊藤さん、怒りっぽいのはよくないですよ。マイノリティが自分達のことをマジョリティに伝えたいと思ったら、ニコニコしながら優しく話さないと駄目ですよ。」と言いました。私は、ついに怒りが爆発し、「マイノリティは怒っちゃいけないんですか。どんな酷いことを言われても黙って我慢しないといけないんですか。」大声で反論しました。スタッフの人達も、「伊藤さんが怒っているのは、ずっと差別されてきた思いがあるからなんですよ。魂の叫びなんですよ。」とフォローしてくれました。

その後も、90年代に講演研修活動を続けるなかで、「マイノリティがマジョリティに受け入れてもらいたいのなら、いつもニコニコしていた方がいい。」という類のことを言われたことが5回もありました。

- (2) この他にも、講演の際に感情を出すことを否定された忘れることのできない経験があります。あるとき、私立高校のPTAに招かれ、「ゲイのカッ

ブルを呼んで話を聴きます」というイベントにおいて、築瀬と二人で話をすることになりました。会場の高校に着くと、学校中に私達のイベントのポスターが貼られていました。そのポスターを見ると、男の子ふたりがじゃれているイラストが描いてあり、その脇に「僕たちホモダチ」と書いてありました。私は、真面目にセクシュアリティについて話をしようとしているのに、面白おかしく扱われていることに憤慨し、学校中を走り回ってポスターを剥がし、主催者に抗議しました。しかし、主催者の反応は鈍く、もやもやしたまま講演を始めました。

私は、講演のなかで、同性愛者であることで受けた辛い経験を話しましたが、過去の辛かった思いとポスターを見たときの悔しさがシンクロして、思わず涙が出ました。その後、主催者から、聴衆のなかに私が泣いたことに文句をつけ、「あれはウソ泣きだ。」と噂を流した人がいたという話を聞きました。私は、本心から流した涙に対して、「ウソ泣き」と言われたことが悔しくて、半年くらい心に棘が刺さったような状態が続きました。

このように講演活動のなかで、「マイノリティは怒ったり、泣いたり感情的になってはいけない。」と言われることが非常に多くありました。感情の表現の仕方を工夫してくださいというのであれば理解できますが、マイノリティであることを理由に自然な感情を出すこと自体を否定されることに納得がいかず、その度に悔しい思いをしました。

- (3) 設立当初、「すこたん企画」の存在を知ってもらうため、築瀬は、千葉県・東京の主な中学・高校の養護教諭宛に3000通の手紙を送り、学校で同性愛について話をさせてほしいと案内しました。反応は数通しかありませんでしたが、そのなかに性教育を行う教師達で結成された「“人間と性”教育研究協議会」(性教協)に所属する養護教員からの講演依頼がありました。そ

の後、私と築瀬が、性教協の全国大会のシンポジウムでパネラーとして話をしたのをきっかけに、性教協の各地方のサークルなどで教員向けに講演をする機会が飛躍的に増えました。

また、文部科学省が、90年代に入って性教育の取り組みを推進していたことも追い風になり、設立1年後に高校生を相手にエイズについて授業をすることができました。また、設立2年後には、山口県の公立中学校で、約170人の生徒に同性愛について授業を行いました。これは、日本で初めて同性愛者自身が中学校で同性愛について行った授業であり、設立以来の私達の念願が実現しました。

私は、授業のなかで、なぜ同性を好きになるのかという生徒の質問を基に、性的指向について説明し、性的指向は自分の意思でコントロールすることはできないことを説明しました。また、同性愛に対する偏見があることから、同性愛者は同性が好きなことを隠して、異性愛者のふりをして生きざるをえないこと、まわりが「ホモ」と言って笑っているときに、笑わないと「お前もホモか」と疑われるので一緒に笑わなければならないなど、日常生活で様々な生きづらさを抱えていることを話しました。

また、築瀬も、小学校時代に男らしくないといじめられたが、誰にも苦しいと相談できなかつた経験を話し、「自尊心」とは本当は「人に弱みを見せられること、苦しいときに苦しいと言って助けを求められること」なのだと話しました。また、小学校高学年になって同性に惹かれると気づいたが、テレビでは「ホモ」「オカマ」とからかわれ、辞書を引いても「異常性欲」と書いてあり、長い間自己否定感に苦しんだことを話しました。私達の話が終わると、生徒から大きな拍手が起こりました。

授業後の生徒のアンケートでは、何人か否定的な反応がありましたが、同

性愛者がこんなにつらい思いをして生きていたのを知らなかった、同性愛者に対するイメージが変わったという感想がほとんどで、差別はおかしいという感想が多くありました。

- (4) その後も、講演や研修の依頼が増えていき、90年代後半には学校で年50件の講演・研修を行うまでになりました。当事者である私達が、直接生徒や教員に対し、同性愛者の生きづらさを伝え、同性愛者に対する偏見を解いていくことはやりがいのある活動でした。また、聴衆のなかに当事者がいて、講演の後に励まされたと感謝されたこともありました。

他方で、自分達につらかった経験を話しても、否定されたり、反応がないことも多く、その度につらい思いをしました。また、毎回のように「どうして同性を好きになるのか生物学的に説明してほしい。」という質問があり、そのような質問は「なぜあなたは異性愛者なのか。」と聞くことと同じで意味がないと説明しても理解してもらえず、質問タイムになると気が重くなりました。このようなことが積み重なり、私達は精神的に疲弊していききました。

6 ワークショップを始めた経緯

- (1) 2000年代に入ると、国会議員による国会質疑をきっかけに保守派による性教育へのバッシングが始まり、各地の教育現場において性教育を規制する動きが強まったことから、講演・研修の依頼が激減しました。私達自身も講演活動に疲れていたこともあり、「すこたん企画」の活動内容を見直すことにしました。

今でこそ、SNSで簡単に出会うことができますが、当時は、ゲイ・バイセクシュアル男性の出会いの場がほとんどありませんでした。そこで、ゲイ・バイセクシュアル男性の生き方や友達づくりをサポートする活動にシ

フトすることにし、団体の名称も「すこたんソーシャルサービス」に変更しました。2002（平成14）年から10代・20代向けの「ピアフレンズ」という友達づくりのイベントを始めたところ、参加者が100人を超えるまでに人気を集めるイベントになりました。その後、あまりに規模が大きくなり他の活動に差し支えるようになったため、スタッフとして参加していた現在参議院議員の石川大我さんに運営を引き継ぎました。

- (2) 私と築瀬は、これまで2人で突っ走ってきたけれども、ここで一旦立ち止まり、色々なゲイ・バイ男性に会って話をし、そこから色々なことを吸収して原点に戻ろうと考え、2005（平成17）年から、少人数でテーマを決めて話したり、雑談をしたりするワークショップを開くようになりました。

ワークショップには、大きく分けると出会いや友達づくりのための交流系と雑談やテーマを決めて話し合うトーク系の2つがあり、形を変えつつ現在も週1回のペースで開催し続けています。

「ワンシームトーク」は、ひとつのテーマを決めて10人くらいで話し合うワークショップです。ワークショップを始めたときから続けており、時代に合わせてテーマを設定してきましたが、昔も今も変わらぬ定番のテーマも少なくありません。

たとえば、「ノンケ社会との折り合いのつけ方」はいまだに続くテーマです。15年経っても、カミングアウトしやすい職場・学校は増えていません。自分のセクシュアリティを隠さざるをえないとき、どうすればいいのか・・・恋バナを異性愛前提で振られたとき、恋人の存在や結婚の予定を尋ねられたとき、お見合いや合コンなど恋活を勧められたとき、同性が好きだと伝えることにはリスクが伴います。職場や学校で、嫌われたり、噂になったりして仕事や勉強を続けにくくなったら大変なストレスになります。今も昔も

悩みは変わらないため、定番のテーマであり続けそうです。

また、「カミングアウト」も定番のテーマです。始めた当初は、そもそもカミングアウトをするかどうか話題の中心でしたが、最近は、カミングアウトをすることを前提に、タイミングや打ち明ける人の範囲に話題が移ってきました。しかし、最近も、ある参加者が、両親にカミングアウトをしたら、父親から離縁を言い渡され、母親も理解をしてくれなかったというつらい経験談を泣きながらしてくれたこともありました。時代が変わっても、自分のセクシュアリティを周囲に伝えることの大変さは未だに変わっていないと感じます。

7 築瀬との二度目の同居生活

同居を解消した後、私と築瀬は各々実家で暮らしていました。その後、互いに親の介護をしていたことから、一緒に住むことはありませんでした。

2011(平成23)年、築瀬が腹部に激痛を訴えて病院に駆け込みました。私も一緒に病院へ行き、看護師に築瀬のパートナーであると伝えたのですが、親族ではないと言われ診察室に付き添うことができませんでした。また、CTスキャン検査を受ける時も立ち合いを断られ、診察室の近くの椅子に座って待つしかありませんでした。築瀬は、激痛のなかで私の姿がないことに不安を覚え、私に会えないまま死んでしまったらどうしようと怖かったそうです。1時間以上待つようやく築瀬が戻ってきて、尿管結石だったことを知りました。結婚していればパートナーの診察や検査に立ち会うことは当然認められることです。しかし、25年間パートナーとしてやってきても、家族と認められず、互いの死に目にも会えないかもしれないという事実には愕然とし、みじめな思いをしました。

同じ年に、東日本大震災が起こり、病気や災害など将来何が起こるかわから

ないと実感し、また、老後の生活への不安も増してきたことから、一緒に支えあって生活しようと話し合い、2度目の同居生活を始めることになりました。

二人で同居する上で一番苦労したのは、部屋を借りることでした。これまで数回引っ越しをしましたが、男性二人で同居すると申し込んでも審査に通らないのです。不動産業者から、片方の名義で契約して後から一緒に住めばいいとアドバイスを受け、やむを得ず、私の名前で契約して事実上同居していましたが、常に大家にばれれば退去しなければならないという不安を抱えながらの生活を強いられ、精神的につらい思いをしました。

8 LGBTを巡る状況の変化

2015（平成27）年、渋谷区と世田谷区において、同性パートナーシップ宣誓制度が導入され、テレビや新聞でもLGBTという言葉を目にすることが多くなりました。それとともに、「すこたん」への講演依頼が再び増えていき、学校や自治体で、年約15回講演や研修を行うまでになりました。

私達は、2019（平成31）年1月から千葉市でもパートナーシップ宣誓制度が始まることを知り、2018（平成30）年11月、パートナーシップ宣誓のために千葉市へ転居しました。

私達は、不動産会社の担当者に、自分達はパートナーで、千葉市でパートナーシップ宣誓をするために転居するのだと話しました。すると、担当者が上司にこれを報告し、1日足らずで審査が通り、初めて築瀬を同居者と明記して契約することができました。

2019（平成31）年1月、私達は、千葉市のパートナーシップ宣誓制度の第1号として宣誓を行いました。私達は、交際して30年以上経つにもかかわらず、自分達がパートナーであることを説明する際に、「同性パートナーで、つまり私たちはゲイで、一緒に住んでいて…」と言葉をつくして説明しなけれ

ばならず、大変な思いをしてきました。結婚している男女であれば夫・妻の一言で済む話だと思えます。しかし、パートナーシップ宣誓により、証明書1枚でパートナーであることを説明できるようになりました。

また、最近、私が高熱を出して市立病院で夜間診療にかかったとき、築瀬が付き添ってくれましたが、パートナーシップ宣誓証明カードを持っているというだけでとても安心感がありました。そして、私が診察を受ける際に、これまでの苦勞が嘘のようにすんなり築瀬の同席が認められました。

このように、パートナーシップ宣誓制度によって日常生活がとても暮らしやすくなり、公的な制度で認められることの重要性を実感しました。

9 同性婚に対する思い

私と築瀬は、それぞれ紆余曲折はあるものの、人生の半分以上を共に歩んできました。その間、ふたりがお互いのパートナーであることを周囲に、また社会に受け入れてもらえない口惜しさを絶えず感じていました。

それは、同性どうしのパートナーシップなど「おかしい・とんでもない・気持ち悪い・認めない・ありえない…」と露骨に言われる「同性愛嫌悪」であったり、ふたりで暮らす家を借りられないとか病院で相手の親族扱いされず医者と話もできないとかの社会制度上の壁だったりしました。

どちらにせよ、同性カップルの「存在」そのものがほとんど誰からも認められない中、何十年とその理不尽さを訴え続けて来ました。地道な活動を積み重ねたひとつの成果として、パートナーシップの認証制度が各地方自治体で作られるようになり、私たちも千葉市で「パートナーシップ宣誓」をすることができました。これにより、病院の診察に立ち会えたり、ふたりで堂々と賃貸マンションを借りられた時は、心からうれしく思い、泣きそうになりました。

しかし、現在の「パートナーシップ宣誓」だけでは、法律的な効力はなく、

男女の夫婦と同様の立場が得られたわけではありません。ふたりして歳を重ねてきて、今後起こるであろう相続や介護などの不安は解消していません。社会保障制度や税制上の不利益も残っています。パートナーシップ制度を導入していない自治体に行った時に家族として扱ってもらえないかもしれないという不安もあります。そうすると、同性カップルも異性カップル同様に婚姻ができたらと考えずにはおれません。これは決して特権を求めているのではなく「異性カップルと同じ土俵に立ちたい」という切実で自然な要求です。

私たちが時間をかけてはぐくんできた「生」を実りあるものにするために、また他にもたくさんの同性カップルが培ってきた「生」を同じく実りあるものにするために、基本的人権の問題として、同性婚の実現を強く求めます。

以 上